巻頭言

市立札幌病院副院長
医療安全推進室室長
関　利盛

私たちの新しい取り組み
ー地域医療連携とM&M Conference についてー

市立札幌病院広報誌「かざぐるま」が創刊されて5年目を迎えました。当院は地域医療を支援するためいろいろな取り組みをしながら、この5年間を経過してきました。地域の先生方や患者さんに当院の医療資源を十分に利用していただくために開放病床の設定や、外来受診の予約受付、身体合併症を有する精神疾患患者の受け入れなど、他の医療機関にはない私たち独自の医療を提供しております。

また、医療現場では複雑な疾患を有する患者さんの受け入れも行っているところです。様々な疾患を有する患者さんの受け入れは、当院のような専門性の高い診療科を有する総合病院が行い得る治療手段です。しかし、複雑な疾患を有する患者さんであればあるだけ、医療現場では医療の安全性を担保する必要があると考えました。それは医師、看護師だけでなく、事務職も含めた病院全体として取り組んでいくべき事柄であると考えました。このような考えから昨年度からM&M Conference という会議を開いて、それぞれの立場から医療に対する考えを述べていただいております。今回は、このM&M Conference を通じての私たちの医療安全への取り組みを紹介したいと思います。

M&M とは

M&M ConferenceのM&M とは　Morbidity（病的状態）& Mortality（死亡状態）の略語です。そのことから、死亡した症例を病理的に検討するDeath Conferenceと同じようにとらえられています。市立札幌病院でも以前から死亡症例検討会が定期的に行われてきました。不幸にして亡くなられた患者さんの状態を、医師が検証して今後の対策に役立てるというprocessは外せないものだと考えています。しかし、死亡された患者さんだけでなく、臨床的に全力で治療を行ったが予想もしていなかった結果となってしまった症例や、経過観察中に重症化してしまった症例なども現場では時々みられることです。

M&M Conference 風景

こういった症例をM&M Conferenceにあげていただき、医師だけでなく、看護師、臨床工学技士、放射線技師、検査技師、薬剤師、事務職員などの院内で働いている全ての職種で情報を共有し、対策を考える会にするために、このConferenceを立ち上げました。

この会の構成委員としては、医療安全推進室長、臨床研修プロジェクトチーム委員長、救命救急センター部長、学術研修委員長とし、医療安全推進室を事務局にしました。

実際の運用について

実際の運用について説明します。年間3回～4回の開催を予定しております。1回のConferenceで取り上げる事例は1～2例としています。症例に関しては院内公募あるいは構成委員からの指定としました。会の開始に先立って必ず以下のことを確認するようにしています。つまり、発生した事象の要因を分析して問題点を抽出して検討する会であり、責任追及の場ではありませんので、個人を糾弾するものではないと宣言しています。当事者を守ることも考えておく必要があります。議長は、何が起きたのかを明らかにするため議事を進行する必要があります。そのため時間経過を正確に記したイベントレビューを利用して検討しています。専門性を高めるため、あらかじめ事例に応じて専門家を招集しておき、質疑応答の中でコメントを求めています。これまで2回の開催をしています。事例と参加者の内訳を表にして示します。医師だけでなく、多様な職種の職員が参加していることがわかると思います。今後は、M&M Conferenceで決定したことを、いかに現場に戻していくかを真剣に考えることが必要なのだと考えています。

今後も、このM&M Conferenceは継続していくつもりですが、何かご意見、ご要望などありましたらご指摘いただけると幸いです。今後ともよろしくお願いいたします。

M&M Conference　報告書

第1回M&M Conference
開催日時:2013年2月21日　17時30分～19時
参加者数:77名（医師:29名、研修医10名、看護師26名、放射線技師1名、検査技師9名、薬剤師1名、経営管理室1名）
事例1:小脳出血を発症した患者の診療経過について
事例2:前立腺がん患者の入院に至るまでの経過について
第2回M&M Conference
開催日時:2013年6月17日　17時30分～19時
参加者数:78名（医師28名、研修医9名、看護師24名、放射線技師3名、検査技師2名、薬剤師2名、地域連携3名、経営管理部3名、その他4名）
事例1:時間外外来を受診した出血性潰瘍患者の経過について
事例2:外来受診時にコードブルーとなった患者の経過について